トイレ掃除

【本物でなければいけない、と強く思う時がある。そして多く場合子どもが教えてくれる】

ある中学校での清掃時間の出来事である。

私は、理科準備室に急いでいた。男子トイレを通りかかると、男子数名がトイレにたまっている。「どうしたんだ？」と聞くと、大便器の排水がつまってトイレが水浸しだという。見ると、確かにトイレは水浸しだ。どうも大便器の排水部分に何かががつまっているらしい。どこかの学校のある若い先生が、トイレがつまった時に敢然と素手をトイレにつっこんで、つまりを直したことで、生徒からある種の尊敬を集めるようになった、という話が頭をよぎった。

私は持っていた荷物を理科準備室に置き、再びトイレに戻った。素手でというのは私にはとてもできないので、ゴム手袋をはめ渋々トイレに戻ったのだ。すると、もう直ったと生徒は言う。「どうしたの？」と聞くと、「〇〇君が手を突っ込んでトイレットペーパーを出したんです。」とのこと。素手をつっこんだ生徒は、平然と流しで手を洗っている。その額にはひとすじの汗。彼の額に光る何の計らいもない汗と、計らいの象徴のような私の手にあるゴム手袋。その光景を思い出すたびに恥ずかしい。

汗をかくために何かをするのではない。気持ちよく体を動かした結果の汗がすがすがしのだ。